

## 木綿



木綿の糸紡ぎ

シルク、麻と天然の繊維を見てくると、どうしても触れておかなければならないのが木綿です。

我々の日常生活のなかで木綿は、あたりまえのように使われている素材ですが、実は日本で使われるようになったのは、戦国時代末期からといわれています。では、それまで、日本人は何を着ていたのか、ほとんどが麻でした。絹もあったのですが、絹は宮廷への献上品がほとんどで、庶民の生活に使われるまでにはなっていませんでした。

しかし、麻が広く使われるといっても、麻の原料である苧麻から糸を績み、それを織物にするためにはとてつもない作業が必要でした。四季報 51 でも紹介したように、現在では麻織物は高級品ですが、織物を作る工程は基本的に変わりません。

それが、大きく変わったのが木綿の登場です。木綿が登場したことのインパクトについては、民俗学者、柳田國男の「木綿以前のこと」に詳しく描かれています。

戦国末期から、国内でも木綿の栽培がはじまり、江戸時代には広く普及するようになりました。畿内を中心に、中国地方、東海地方で広く作られるようになり、

木綿の肌触りの良さは、それ以前の麻とは全く違っていました。柔らかさと肌触りの良さは木綿にしかないものでしたし、それは絹とも違い、温かさがありました。もう一つの特徴が染が容易なことです。麻では自由な染色ができませんが、木綿は絹と同様、様々な色に染め上げることができました。

また、糸を紡ぎ、織物にするまでの工程が、麻にくらべてはるかに楽でした。綿花の生産は自家消費用だけではなく、換金作物として作られるようになり、江戸時代末期には、水田耕作にも支障が出るほどだったといえます。

現在でもその名前は、各地の名産品として残っています。三河木綿、河内木綿、伊勢木綿などがその代表です。

現在では、国内での綿花の生産はほとんどなく。わずかに観賞用として生育されているぐらいですが、木綿の花はなかなか美しいものですし、花が咲いた後、しばらくすると青い桃のような実がつきます。それが次第に成長し、1 カ月もするとはじけて中から白いふわふわした綿の実があらわれます。これがコットンボールです。コットンボールを乾燥させ、繊維を引っ張って糸を紡ぎます。



綿の花

コットンボール

紡いだ糸は、織物となり、日常の素材として広く使われるようになりました。明治になって日本の紡績業は大きく発展しました。その背景には、江戸時代から各地に広がった木綿織物の蓄積があったことがあげられます。その歴史と技術には興味深いものが沢山あります。ただ、木綿の織物は、日常使うものだけでなく、なかなか残っていないといえます。

天然素材である木綿は、いまあらためて環境にやさしい素材として、注目を集めるようになっていきます。あらためて、木綿の魅力を引き出すことが求められています。

私たちの事務所は日本橋にあります。江戸文化発祥の地でもあり、最近様々のイベントが開催されるようになりました。写真は、10月末に開催されたの「めぐるのれん展」の様子です。のれんという伝統製品のなかに新しい表現を見出そうという試みです。

伝統の木綿に濃紺の藍染のれんだけでなく、新しいのれん文化の兆しとなるような様々なのれんが100m にわたって展示されていました。

